福岡市埋蔵文化財調査報告書第１３７１集

博多１６５

―博多遺跡群第２１５次調査報告―

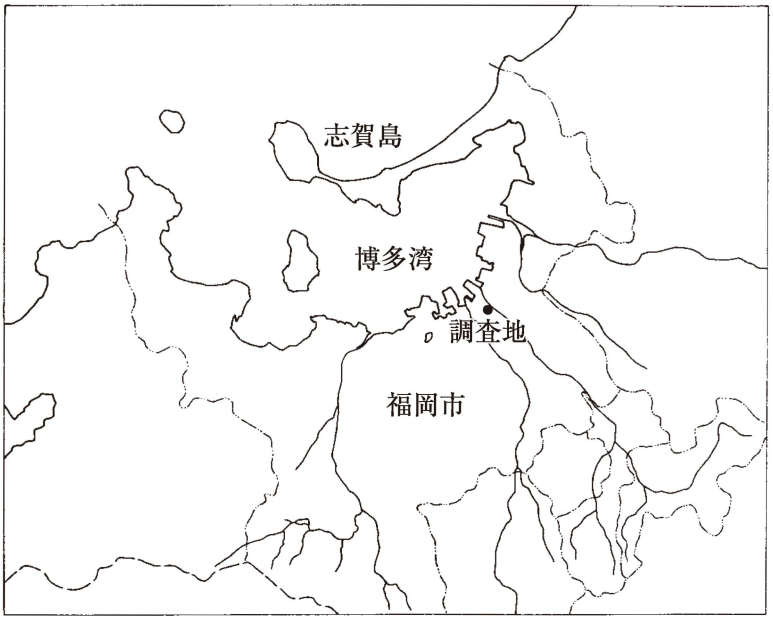
2019

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第１３７１集

博多１６５

―博多遺跡群第２１５次調査報告―



2019

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市は古くから玄界灘を介したアジア各地との交流の玄関口として発展してきました。地中に埋もれた数々の文化財は、人々が歴史・文化を積み重ね、現在の地域・社会を形作る礎となったことを示す大切な資料です。福岡市教育委員会では開発などでやむを得ず遺跡が破壊される折には発掘調査を実施し、記録として残していけるよう努めております。

本書は、共同住宅建設に伴う博多遺跡群第２１５次調査の報告です。中世の町割りを区画する大溝と多くの井戸跡を発見し、また中国からもたらされた陶磁器をはじめとする多くの遺物が出土しました。これらは当時の貿易で拠点的な役割を果たした港町博多の繁栄を示します。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました株式会社モダンプロジェ様をはじめとした関係者の方々に心から感謝申し上げます。

平成３１年３月２５日

福岡市教育委員会
教育長　星子明夫

例言

１、　本書は博多区上呉服町地内の共同住宅建設に伴い、平成 29(2017)年 10 月 12 日から平成 30(2018)年 1 月 19 日に発掘調査した博多遺跡群第 215 次調査の報告書である。
２、　遺構の実測は朝岡俊也・牧之角健太が行った。
３、　遺構の写真撮影は朝岡が行った。
４、　遺物の実測は元田晃子・野村美樹・山本麻里子・平田春美・林田憲三・三浦萌が行った。
５、　遺物の写真撮影は朝岡が行った。
６、　製図は朝岡が行った。
７、　本書に掲載した方位はすべて座標北である。
８、　本書に掲載した座標は世界測地系を用いた。
９、　本書に掲載した標高は都市再生街区基準点 2A106(H=6.142m)を基準とした。
１０、本書に使用した遺構略号は以下の通り。
　ＳＤ　溝　　ＳＥ　井戸　　ＳＫ　土坑墓・土坑　　ＳＰ　柱穴　　ＳＸ　その他の遺構
１１、本書に関わる図面・写真・遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
１２、本書の執筆・編集は朝岡が行った。

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	215 次	調査略号	ＨＫＴ－215
調査番号	1722	分布地図図幅名	048	遺跡登録番号	0121
事前審査番号	29－2－250	申請地面積	357.05. ㎡	調査対象面積	210 ㎡
調査面積	195 ㎡	調査地	福岡市博多区上呉服町 126 番、127 番、128 番		
調査期間	平成 29（2017）年 10 月 12 日～平成 30（2018）年 1 月 19 日				

本文目次

序
Ⅰ．はじめに
１、調査に至る経緯 …… １
２、調査の組織 …… １
Ⅱ．遺跡の立地と環境
１、地理的環境 …… ２
２、歴史的環境 …… ２
Ⅲ．調査の記録
１、調査の概要 …… ３
２、溝 …… ４
３、井戸 …… １１
４、集石遺構 …… １７
５、土坑墓 …… １７
６、土坑 …… １８
７、不明遺構 …… １８
８、柱穴出土の遺物 …… ２３
９、その他の遺物 …… ２３
１０、小結 …… ２３

挿図目次

Fig.1 博多遺跡群の位置（1/25000） …… ２
Fig.2 第 215 次調査区の位置（1/1000） … ３
Fig.3 南壁遺構切り合い …… ４
Fig.4 第１面全体図 …… ５
Fig.5 第２・３面全体図 …… ６
Fig.6 SD 出土遺物① …… ７
Fig.7 SD 出土遺物② …… ８
Fig.8 SE① …… ９
Fig.9 SE② …… １０
Fig.10 SE 出土遺物① …… １２
Fig.11 SE 出土遺物② …… １４
Fig.12 SE 出土遺物③ …… １５
Fig.13 SX80 …… １６
Fig.14 土坑墓 …… １７
Fig.15 SK・SX …… １９
Fig.16 SK・SX・SP 出土遺物 …… ２０
Fig.17 SP・表層出土遺物 …… ２１
Fig.18 トレンチ・攪乱出土遺物 …… ２２

図版目次

ＰＬ．１（１）Ⅰ区第１面検出（北から）
（２）Ⅱ区第１面検出（北東から）
ＰＬ．２（１）Ⅰ区第１面全景（南西から）
（２）Ⅱ区第１面全景（北東から）
ＰＬ．３（１）Ⅰ区第２面全景（南西から）
（２）Ⅱ区第２面全景（北東から）
ＰＬ．４（１）Ⅰ区第３面検出（南西から）
（２）Ⅱ区第３面検出（北東から）
ＰＬ．５（１）Ⅰ区第３面全景（南西から）
（２）Ⅱ区第３面全景（北東から）
ＰＬ．６（１）表土鋤取り後の状況（南西から）
（２）Ⅰ区南西壁土層
（３）Ⅰ区南東壁土層
（４）SD11・12 完掘（東から）
（５）SD11・12 土層（Ⅰ区南西側）
（６）SD11・12 土層（Ⅰ区中央）
（７）Ⅰ区井戸切り合い（西から）
（８）SE15A（東から）
ＰＬ．７（１）SE16（南東から）
（２）SE18（南東から）
（３）SE20（北西から）
（４）SE39（南西から）
（５）SE39 井戸枠
（６）SE40（東から）
（７）SE108（北東から）
（８）SE108 井戸枠
ＰＬ．８（１）SK71（北東から）
（２）SK117（北から）
（３）SX80 上層①（西から）
（４）SX80 上層②（南から）
（５）SX80 下層（東から）
（６）SX80 拡張部完掘（西から）
（７）SX96・97（北から）
（８）SX112（北から）

Ⅰ．はじめに

１、調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区上呉服町 126 番、127 番、128 番における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 28 年（2016 年）6 月 24 日付で受理した（事前審査番号 28－2－250）。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていること、確認調査において現地表下 270 ㎝で遺構が確認されたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成 29 年 9 月 29 日付で株式会社モダンプロジェを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年 10 月 10 日から発掘調査を、翌平成 30 年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

２、調査の組織

調査委託：株式会社モダンプロジェ
調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査　平成 29 年度）
調査総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課　課長　常松幹雄
調査第２係長　大塚紀宜
調査庶務：文化財部文化財保護課管理調整係　松原加奈枝
事前審査：埋蔵文化財課事前審査係文化財主事　中尾祐太
調査担当：埋蔵文化財課調査第２係文化財主事　朝岡俊也
発掘作業：青木和代　井上澄敏　岩永いさ子　小島君子　坂田巌　杉村修治　髙山哲郎
田中昭子　野崎賢治　野村陽子　原野容子　牧之角健太　松本康子　光安晶子

（整理・報告　平成 30 年度）
整理・報告総括：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課　課長　大庭康時
調査第２係長　大塚紀宜
整理・報告庶務：文化財活用部文化財活用課管理調整係　松原加奈枝
整理・報告担当：埋蔵文化財課事前審査係文化財主事　朝岡俊也
整理作業：執行恭子　中間千衣子　萩尾朱美　原周生　森藤博文

Ⅱ．遺跡の立地と環境

１、　地理的環境

博多遺跡群は福岡市域の東寄りに位置する。二つの２級河川である那珂川と御笠川が博多湾に流れる河口に形成された３列の砂丘上に立地し、北西―南東方向に約 1500m、南西―北東方向に約 900m の広さで展開する。最も北に位置する砂丘は文献資料から「息浜」と呼称し、これに対し内陸側の２列を便宜的に「博多浜」と仮称している。砂丘面まで掘りこまれた遺構ははっきりと検出できるが、中世以降の多くの遺構は様々な土が混ざった盛土・整地層の上から掘り込まれ、遺構検出や掘り方の認識がむずかしい。よって、井戸などの遺構は多く検出されるにも関わらず、建物や町割りの復元は比較的明らかではない。

２、　歴史的環境

博多遺跡群での遺構の出現は弥生時代前期である。はじめは最も内陸の砂丘で遺構が確認され、その後徐々に集落的様相が強くなるとともに遺構の検出範囲が拡大する。弥生時代終末期から古墳時代前期では多様な外来系土器と、全国的にも突出した鍛冶技術が注目され、古墳時代中期には前方後円墳が築かれる。奈良時代には博多浜全域で遺構がみられ、官衙的な性格をもつ遺構が多数出土する。１１世紀後半には貿易拠点が鴻臚館から博多に移ったと理解されており、遺構が急増し、貿易陶磁器などの遺物も大量に出土するようになる。１２世紀初頭には息浜と博多浜が埋め立てられ陸続きになった。１３世紀後半には元寇を画期として鎮西探題の設置や道路の整備などにより都市化が進む。中世末期には豊臣秀吉による町割りの再編（太閤町割）が行われる。

Fig.1　博多遺跡群の位置（1/25000）

Ⅲ．調査の記録

１、調査の概要

第 215 次調査区は博多遺跡群の中央西寄り、博多浜の北部に位置する。確認調査ではＧＬ－270 ㎝で遺跡の残存が確認され、先方に調査に先立ち調査区外周に矢板を打ち込み、その内側の表土をＧＬ-250 ㎝まで鋤取ることをお願いした。ただし、細長い敷地で、隣地の建物が近いため、矢板を深くまで打ち込むことができなかった。よって本調査区の調査面積は 195 ㎡だが、安全上の問題で実際に砂丘面まで掘削できたのは中央部の 87 ㎡で、その外周は第１面の遺構検出までで止まった。調査区は南西側のⅠ区を調査した後、Ⅰ区で出た廃土を先方に持ち出していただき、北東側のⅡ区を調査した。鋤取った面から 20 ㎝程人力で掘り下げた面で中世の大溝を検出し、第１面とした。標高は約 3.9ｍである。第１面から 30 ㎝掘り下げた面を第２面とした。標高は約 3.6ｍ。第２面は大溝に切られて見えていなかった遺構を検出するために任意で（ＳＤ１２底面の高さで）設定した面であり、本来は第１面から掘り込まれた遺構も多く含まれる。よって実質は１－２面としたほうが適切かもしれない。第３面は、初めは鉄分が多く沈着する漸移層上面での遺構検出を試みたが、遺構が不明確であったため、遺構の掘り方がはっきりとわかるきれいな砂丘面まで掘り下げた。第２面から 50 ㎝程掘り下げた面で、標高は約 3.1ｍ。各面の時期は小結で触れる。

検出した遺構は中世のものを中心とし、重複する大溝３～４条、井戸 14 基、集石遺構１基、土坑墓２基、および土坑・柱穴である。陶磁器・土師器・須恵器等がパンケース約 100 箱分出土した。柱穴は奈良時代のものを含むが、建物の復元はできない。その他、古墳時代の遺物がわずかに出土した。

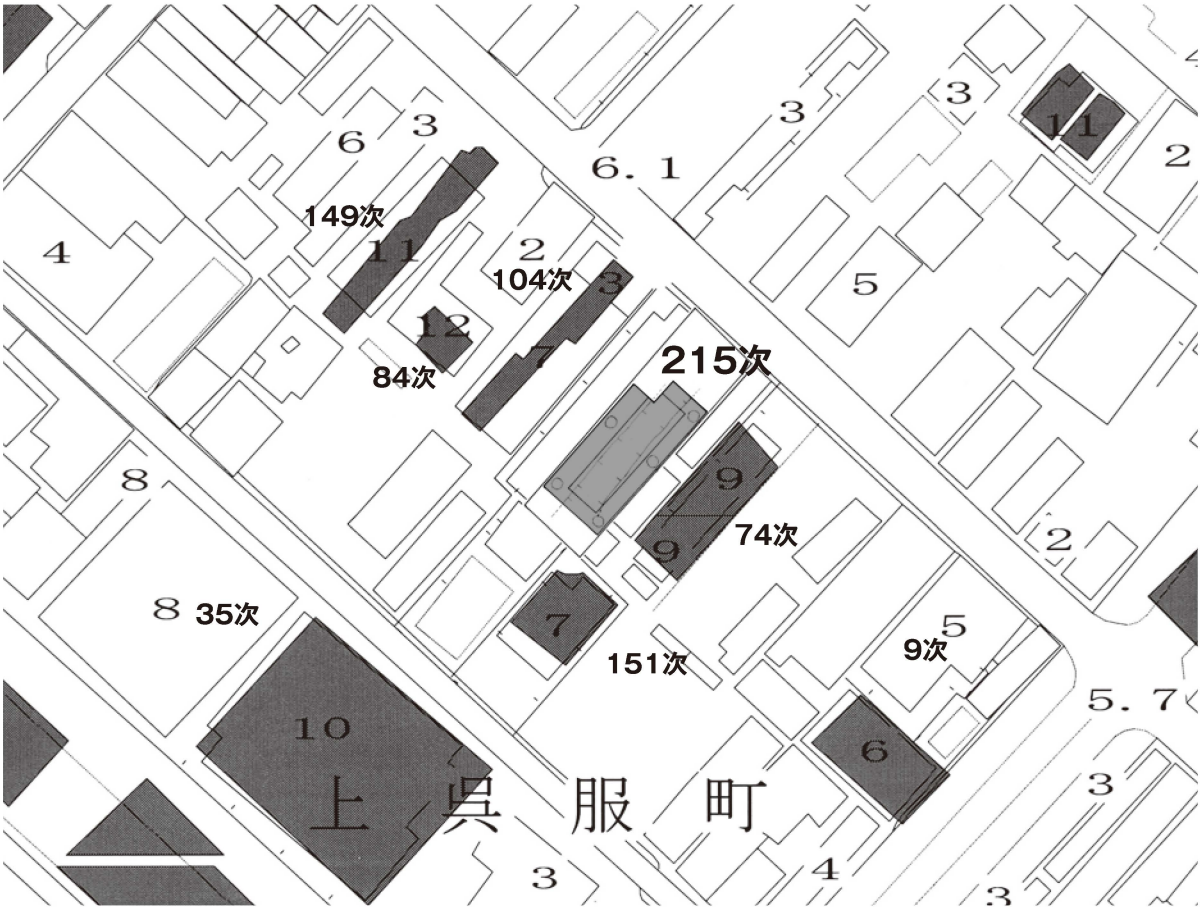


Fig.2　第 215 次調査区の位置（1/1000）

２、溝

SD11（Fig. ３・６・７　PL. ６）

第１面で検出した。調査区を南西から北東へ貫く大溝で、現在の道路の軸にほぼ直交する。Ⅰ区では SD12 を切ると想定したが、Ⅱ区の調査の結果と土層の観察から SD12 に切られる可能性が高い。検出した長さは 21.5mで、幅 2.2m、残存する深さ 0.8mで、底面はちょうど砂丘面に達した深さで掘削が止まる。埋土は上層内側に少しじゃりっとして土器や拳大の石を多く含む黒褐色土があり、その下層にやや粘性の強い暗褐色土が、さらにその下層から外側にかけて暗茶褐色の比較的混じりが少ない土が入る様相が観察できた。第１面からの掘削時はこの内側のみを SD11 の埋土と認識し掘削したため、写真（ＰＬ６－４）では、実際よりも壁の傾斜がきつくみえる。第２面での遺構検出で掘り残しを確認し、完掘した。

１～９は土師器。10・11 は瓦質土器で、10 が足鍋、11 は風炉か。12・13 は白磁で、朝鮮産か。14～ 19 は青磁。20・21 が天目。21 は彫り文様（灰色の線）がみられる。22 ～ 24 が青花。22 は蓋で、文様の色が濃い藍色を呈す。25 が備前陶器の擂鉢。26 が瀬戸陶器の卸皿。27 は（中国？）陶器。28～ 32 が紛青沙器で、28・29 は刷毛目が、30 ～ 32 は象嵌が施される。33 は瓦。34・35 は鞴羽口。36 は土師質の人面。37 は弥生土器。38 ～ 40 は土錘。重量は 38 が 4.25g、39 が 9.83g、40 が 163.79g。41・42 は石臼。43・44 は石塔の部材か。45 は緑色の石材で、表面がすべすべしている。その他、多数の鉄滓が出土した。

SD12（Fig. ３・７　PL. ６）

第１面で検出した。SD11 と同じ軸で、わずかに重なる。SD11 を切る可能性が高い。検出した長さは 21.5m、幅 1.9 ～ 2.1m、残存する深さは 0.35mで、SD11 より浅い。埋土は上層内側に厚さ 10ｃｍ程暗灰褐色粘土が堆積し、その下層から外側にやや粘質が強い黒褐色土が堆積する。

46･47 は土師器。48 ～ 50 は瓦質土器で、48 は釜、49･50 は火鉢か。51 は紛青沙器で刷毛目を施す。52 も瓦質土器の把手か。53 は土製の鈴。54･55 は石製で、54 の中央に紐擦れらしきがみられるため、竿秤権の可能性がある。重量は 54 が 100.03g、55 が 79.48g。

SD35（Fig. ３・７）

SD11・12 に切られるため、第２面で検出したが、本来は第１面から掘り込まれた可能性が高い。軸が揃うことから、SD11・12 は SD35 の掘り直しと考えられるが、SD35 の中でも何度かの掘り直しがある可能性があり、最も古い掘り込み（SD35C に対応？）は軸が南北方向側にわずかにずれる可能性もある。

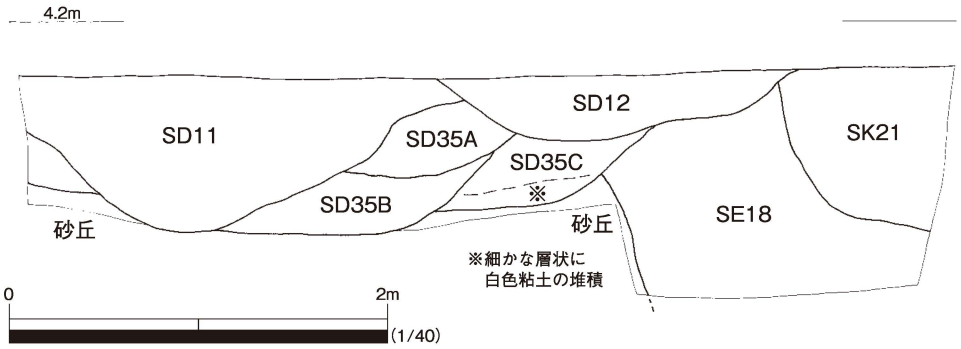


Fig.3　南壁遺構切り合い

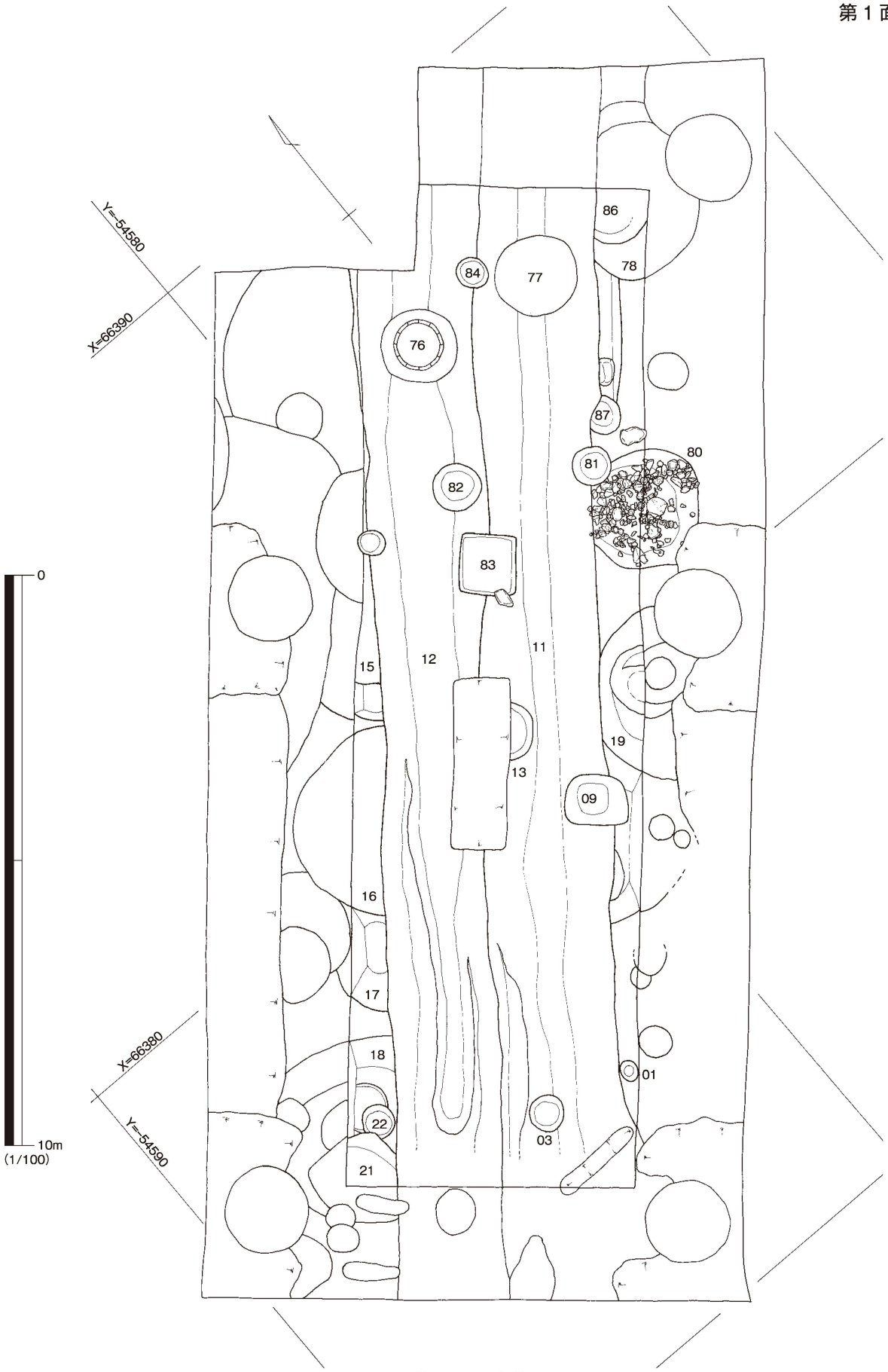

Y=54580
X=66390
X=66380
Y=54590
0
10m
(1/100)
86
78
84
77
76
87
80
81
82
83
11
12
15
19
13
09
16
17
18
01
22
03
21

Fig.4　第１面　全体図

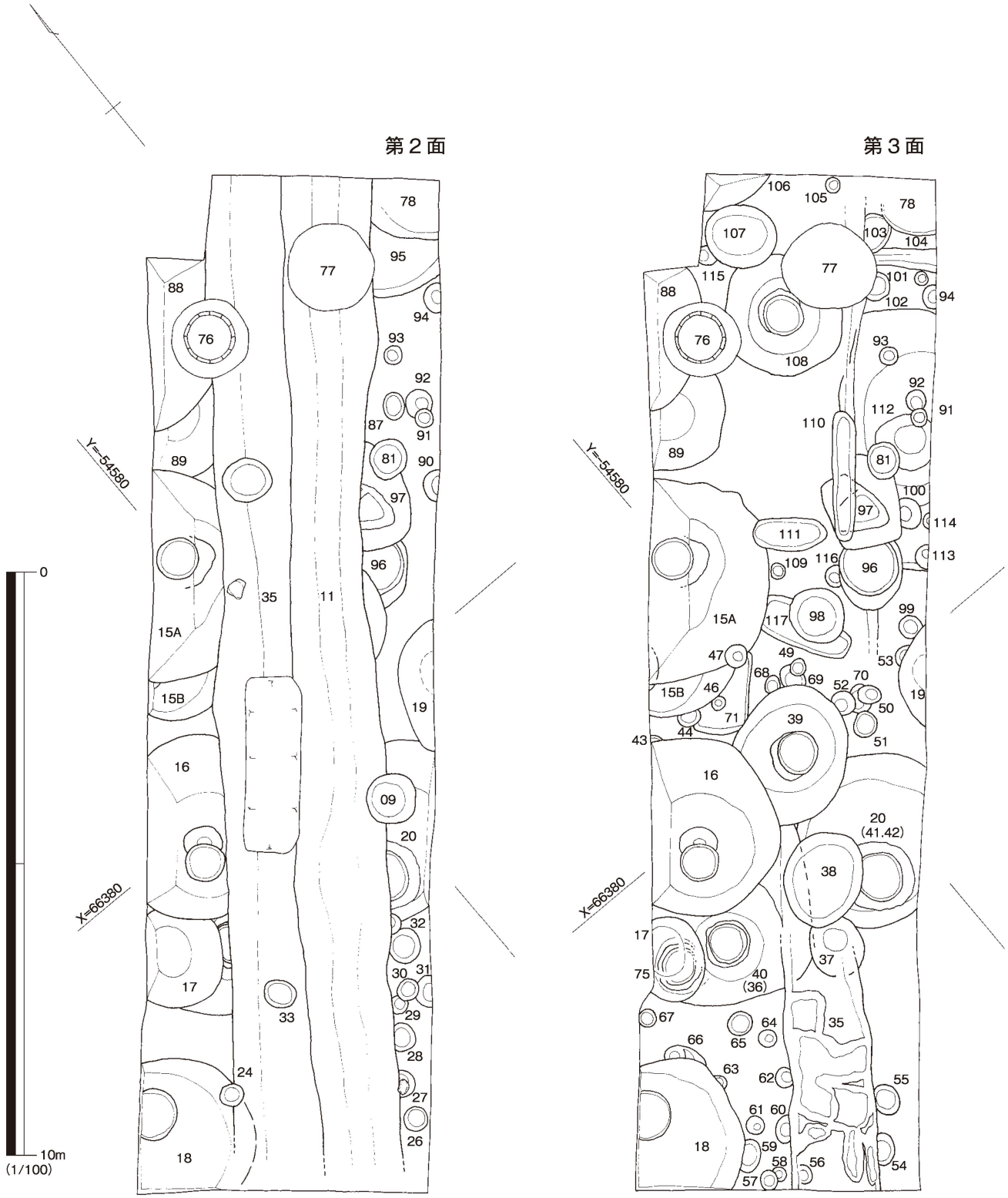


Fig.5　第２・３面　全体図

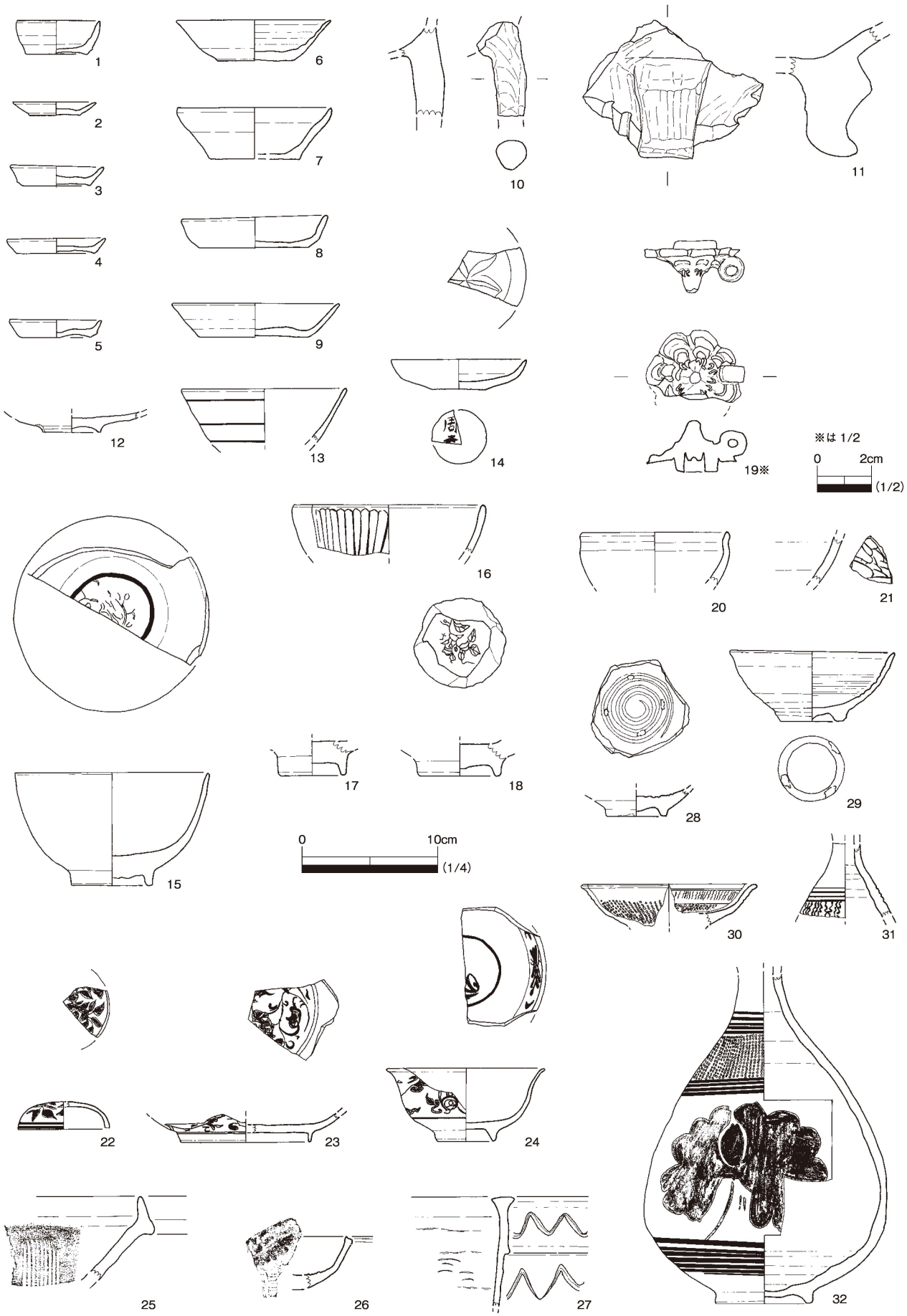


Fig.6　SD 出土遺物①

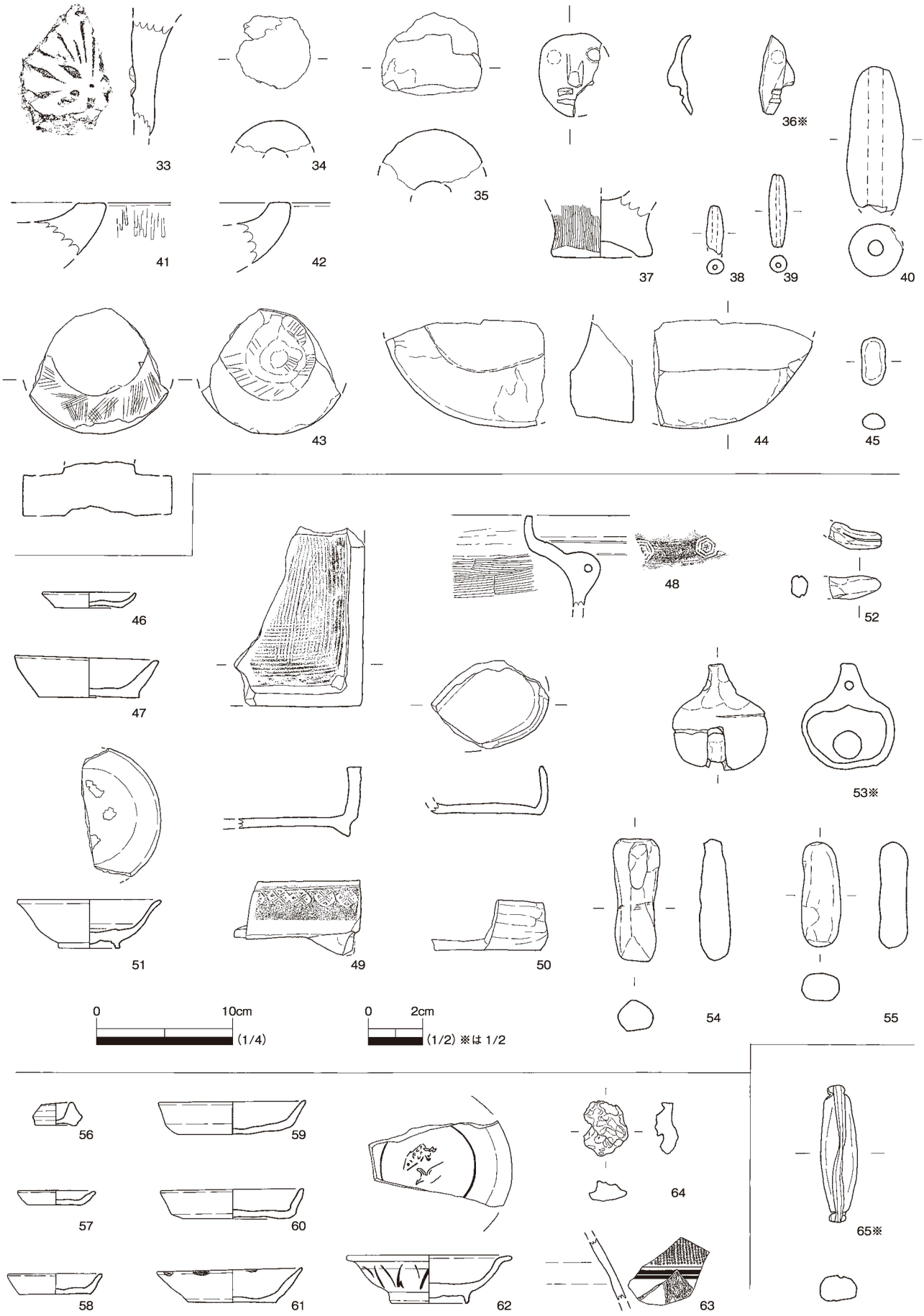


Fig.7　SD 出土遺物②

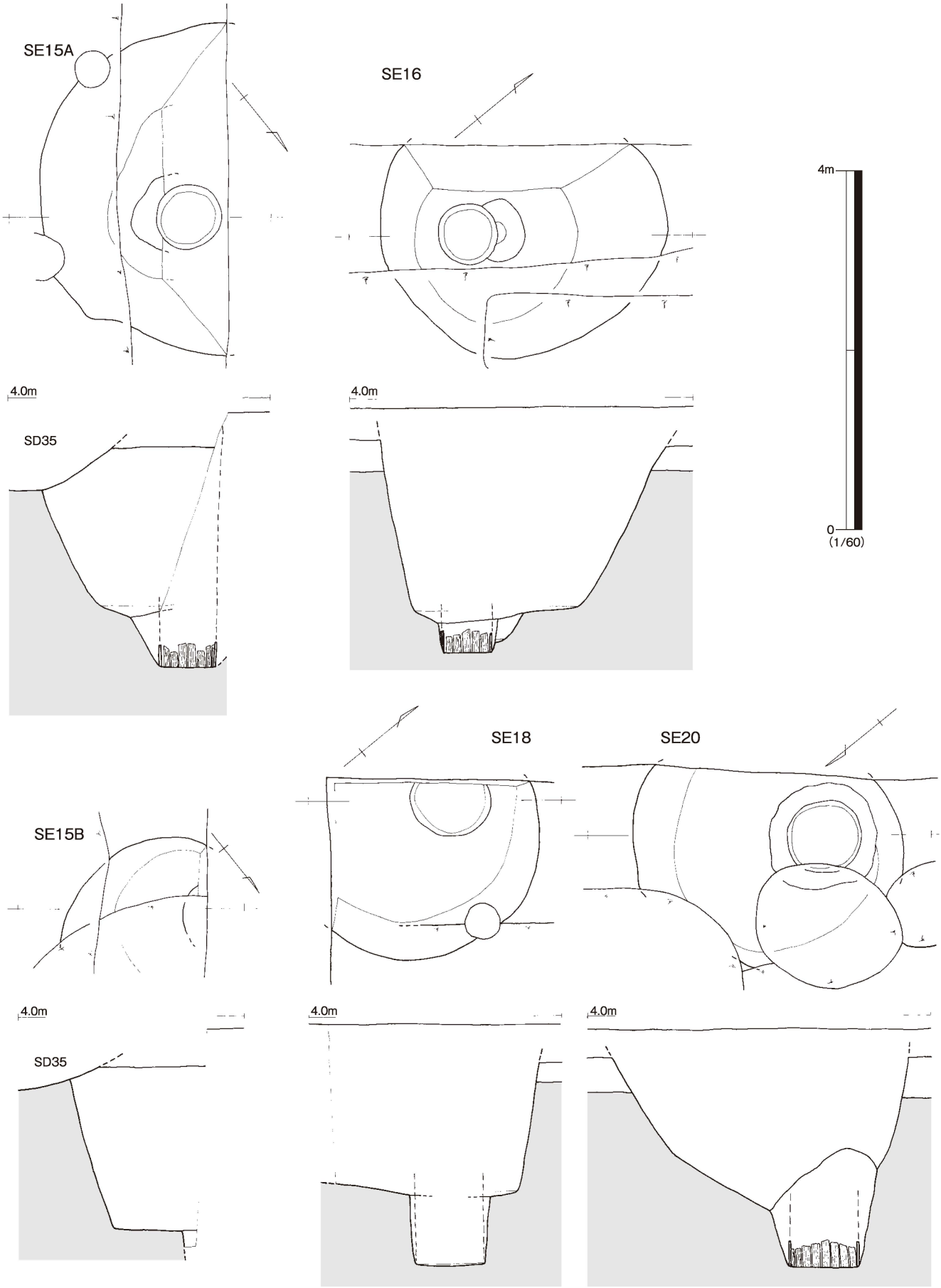

SE15A
SE16
4m
0
(1/60)
4.0m
SD35
4.0m
SE18
SE20
SE15B
4.0m
SD35
4.0m
4.0m

Fig.8　SE①

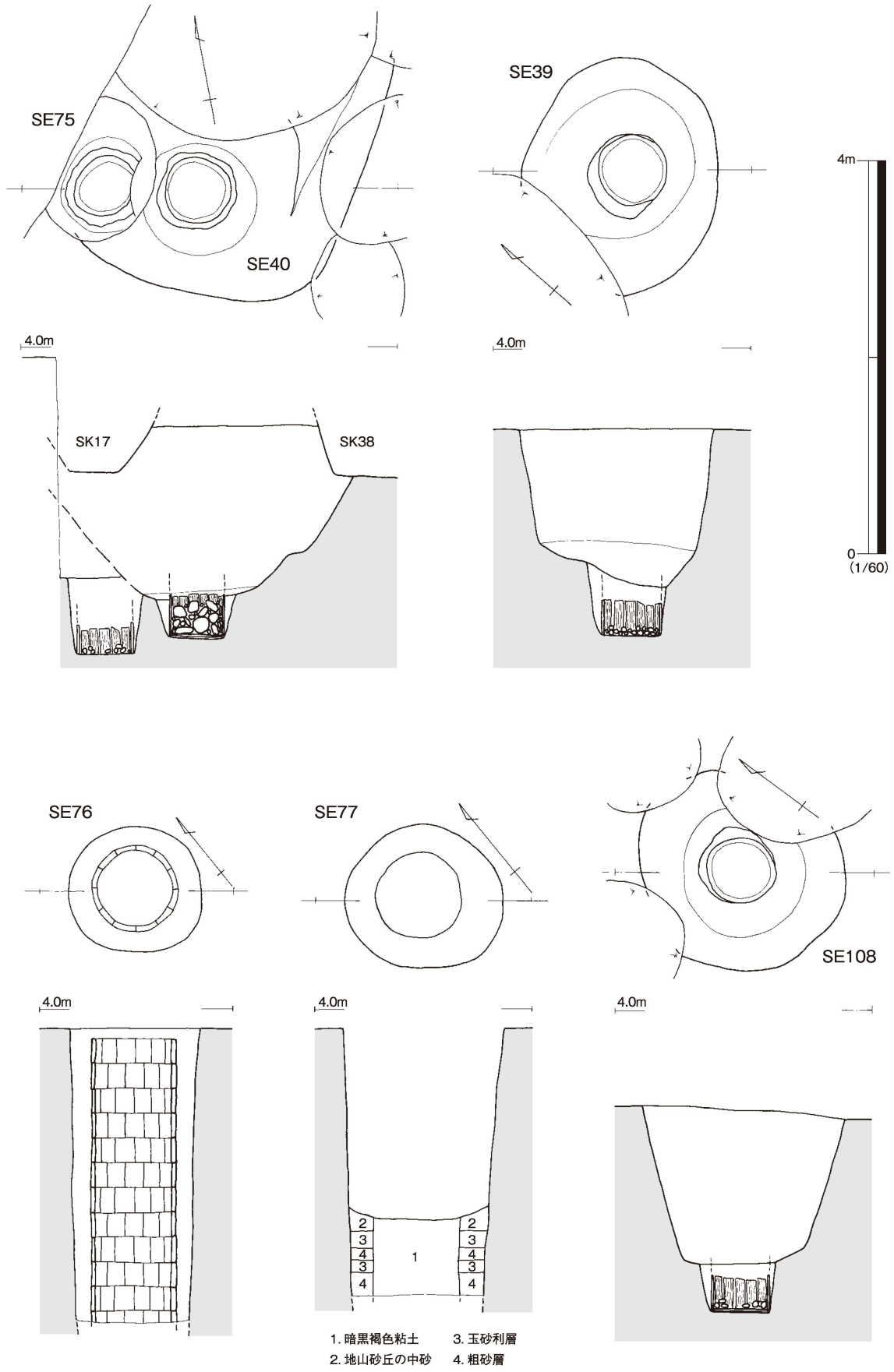

SE75
SE40
SE39
4m
0
(1/60)
4.0m
SK17
SK38
4.0m
SE76
SE77
SE108
4.0m
4.0m
4.0m
2
3
4
3
4
1
2
3
4
3
4
1. 暗黒褐色粘土
2. 地山砂丘の中砂
3. 玉砂利層
4. 粗砂層

Fig.9　SE②

56 ～ 61 は土師器の皿。61 は縁に煤の付着がみられ、灯明皿とみられる。62 は青磁で、畳付および外底部に環状釉剥ぎがみられる。63 は紛青沙器で、象嵌を施す。64 はガラス滓とみられる。

SD104（Fig. 5・7）

第３面で検出した小溝。

65 は滑石製の石錘。重量は 9.06g。

３、井戸

SE15A（Fig. 8・10　PL. 6）

第１面で検出した。第２面からの掘り込みを図化した。I 区調査時には SE15B との切り合いを認識できずに掘削してしまった。底面付近で井戸枠の木桶の痕跡を検出した。底面付近に石は入っていない。

66 は枠内最下層で出土した完形の青磁小碗で、褐色がかった色を呈す。67･68 が掘方（枠外）出土。67 は口禿白磁。68 は青磁。69･70 は土師器。71･72 は白磁で、71 は内面見込みに環状釉剥ぎがみられる。73 は青磁。74 は瓦。75 は製塩土器か。76 は硯で、頁岩製。77 ～ 82 は SE15A・SE15B いずれに属するか不明。77 ～ 79 は白磁。79 はつまみが剥離したものか。80・81 は青磁。82 は青白磁梅瓶。

SE15B（Fig. 8・10　PL. 6）

第１面で検出した。第２面からの掘り込みを図化している。I 区調査時には SE15A との切り合いを認識できずに掘削したため、多くの遺物が混ざっている。底面の井戸枠の痕跡は掘削できなかった。

SE16（Fig. 8・10　PL. 7）

第１面で検出した。第２面からの掘り込みを図化している。当初 SE16 を切る SD35 の存在に気付かずに掘削し、多少遺物が混ざっている。底面付近で井戸枠の木桶の痕跡を確認した。底で湧水はしない。

83・84 が枠内下層出土。83 は瓦器。84 は青磁。85 ～ 95 が掘方（枠外）出土。85 ～ 88 は土師器。89 は口禿白磁。90・91 が青磁。92 は板状の石製品で硯か。頁岩製。93 も硯とみられる。頁岩製。94･95 は土錘。重量は 94 が 9.62g、95 が 27.04g。96 ～ 99 は枠内外いずれの出土か不明。96 は土師器。97 は青磁。98・99 は紛れ込みの須恵器。

SE18（Fig. 8・10　PL. 7）

第１面で検出した。第２面からの掘り込みを図化している。当初 SE18 を切る SD35 の存在に気付かずに掘削し、多少遺物が混ざっている。井戸枠の痕跡は確認できなかったが、掘り方から他の井戸同様に木桶を用いたと考えられる。湧水はしなかった。

100･101 は枠内出土の白磁。101 は口禿。102･103 は掘方（枠外）出土。102 は製塩土器か。103 は白磁。104 は紛れ込みの須恵器。

SE19（Fig. 4）

第１面で検出した。上端の一部が掘削可能範囲内に入るが、下端は範囲外で、下端の標高や井戸枠などは不明である。

105・106 は土師器。107 は白磁。108 は青磁。109 は紛れ込みの須恵器。

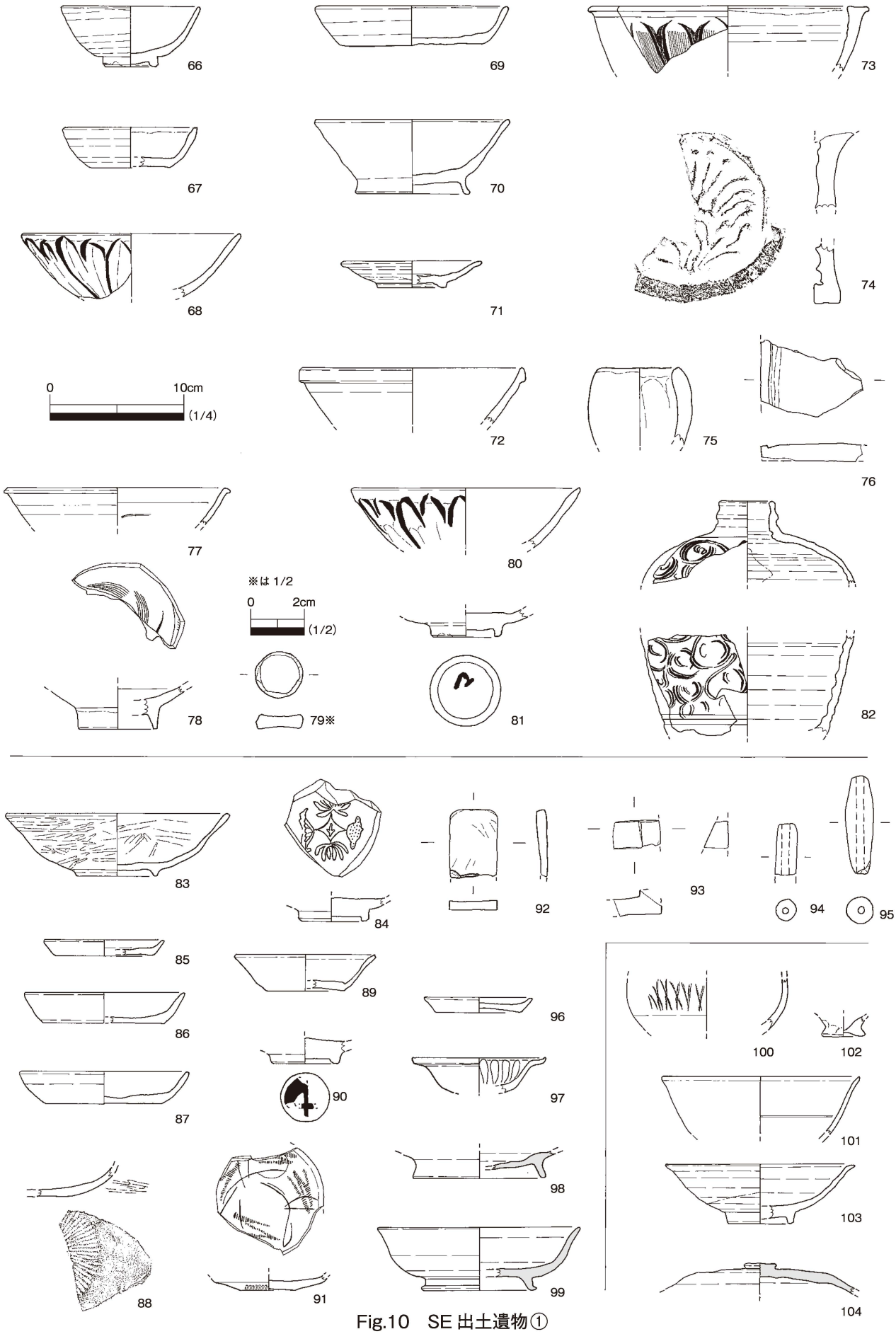


Fig.10　SE 出土遺物①

SE20（Fig. 8・11　PL. 7）

第１面で検出した。第３面からの掘り込みを図化している。SE19 に切られる。井戸枠は黒色粘土化した木桶の痕跡を確認した。SD11 の遺物が多少混ざっているかもしれない。

110・111 は枠内出土の中国陶器壺。112 ～ 114 が掘方（枠外）出土。112 は土師器。113 は白磁で、内面見込みに環状釉剥ぎがみられる。114 は鞴羽口。115 は土師器。116 は天目。117･118 は紛れ込みの須恵器。117 は円面硯か。119・120 はいわゆる棒状土製品に類するものとみられるが、各面がきれいな平らに仕上げられており、形が整っている。内１面に白い付着物がみられる。棒状土製品と同じように、焼台か。

SE39（Fig. 9・11　PL. 7）

第３面で検出したが、SE20 を切るため、本来は第１面から掘り込まれたものである。比較的径が狭く、その分壁が垂直に近い。底面付近で確認した井戸枠の木桶の痕跡は径約 70ｃｍで、幅８～ 10ｃｍ程の板を 20 枚組み合わせる。底には拳大の石を敷き詰める。

121 ～ 125 全て枠内出土。121･122 は土師器。123 は青磁。124 は瀬戸陶器の花瓶。125 は硯。砂岩製。

SE40（Fig. 9・12　PL. 7）

第２面で検出したが、本来は第１面から掘り込まれた可能性が高い。上部の掘り方は方形に見えるが、他の遺構との切り合いを認識できなかった可能性もある。底面付近で確認した井戸枠の木桶の痕跡は径約 65ｃｍで、底板らしき痕跡も確認した。桶の痕跡の中には 40ｃｍ程の高さで拳大～ソフトボール大の石が大量に入っていた。

126・127 は枠内出土。126 は土師器。127 は口禿白磁。128 ～ 135 が掘方出土。128 は土師器。129・130 は白磁。130 は香炉か。131・132 は青磁。133 ～ 135 は常滑陶器か。136 は瓦質で、仏像か。137 は多孔質の石材。火山噴出物のようだが、軽石ではない。

SE75（Fig. 9・12　PL. 7）

SK17 と SE40 に切られ、底面付近のみ残っている。SE40 には確実に切られる。井戸枠の木桶の痕跡を確認し、湧水する。底には「敷き詰める」というほどではないが、拳大の石を入れる。

138 は土師器。139 は青磁。

SE76（Fig. 9）

第１面で検出し、SD12 を切る。井戸枠は長さ 25ｃｍの瓦８枚１組を一段とし、積み上げる。瓦の外周を縛った幅１ｃｍ程度紐のようなもの痕跡が粘土化して残る。井戸枠内からはビックリマンシール等の現代のゴミが出土し、井戸の廃棄年代は 1980 年代以降である。安全上の問題で、底まで調査していない。

SE77（Fig. 9）

第１面で検出し、SD11 を切る。壁はほぼ垂直で、明らかに他の井戸より新しい。井戸枠は円形。下層において、井戸枠外に玉砂利と粗砂を交互に充填する。安全上の問題で、底まで調査していない。

140 は青白磁か。

SE88（Fig. 5・12）

第２面で検出したが、本来は第１面から掘り込まれる。上端の一部が掘削可能範囲内に入るが、下

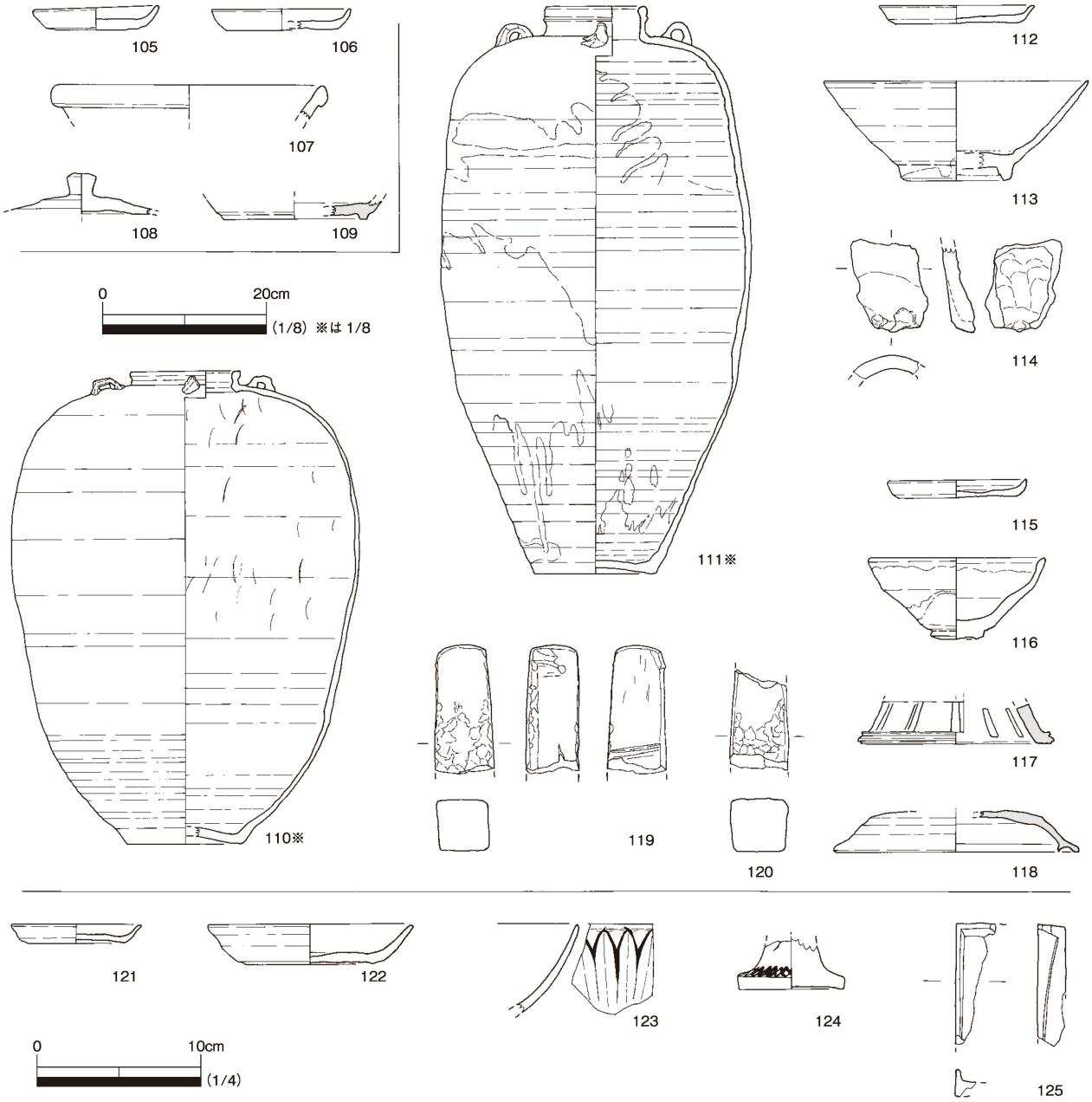


Fig.11　SE 出土遺物②

端は範囲外で、下端の標高や井戸枠などは不明である。

141・142 は掘方（枠外）出土。141 は土師器。142 は青磁。143・144 は土師器。

SE106（Fig. 5）

第３面で検出したが、本来は第１面から掘り込まれる可能性が高い。上端の一部が掘削可能範囲内に入るが、下端は範囲外で、下端の標高や井戸枠などは不明である。

SE108（Fig. 9・12　PL. 7）

第３面で検出したが、本来は第１面から掘り込まれる可能性が高い。比較的径が狭く、その分壁が垂直に近い。底面付近で確認した井戸枠の木桶の痕跡は径約 60ｃｍで、幅６～ 10ｃｍ程の板を 19 枚組み合わせる。底板らしき痕跡も確認した。桶の中には拳大の石が７～８個程度入っていた。

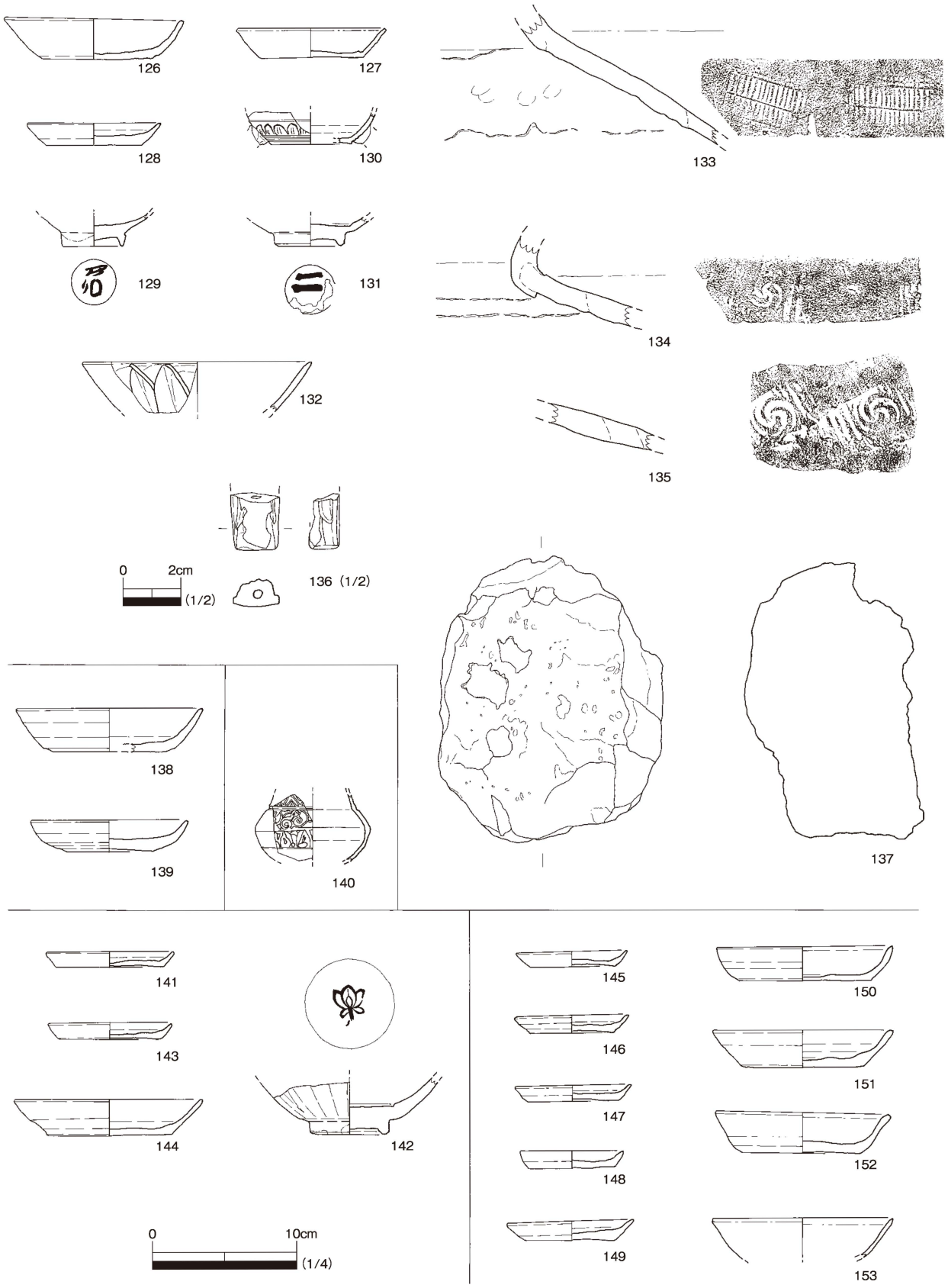


Fig.12　SE 出土遺物③

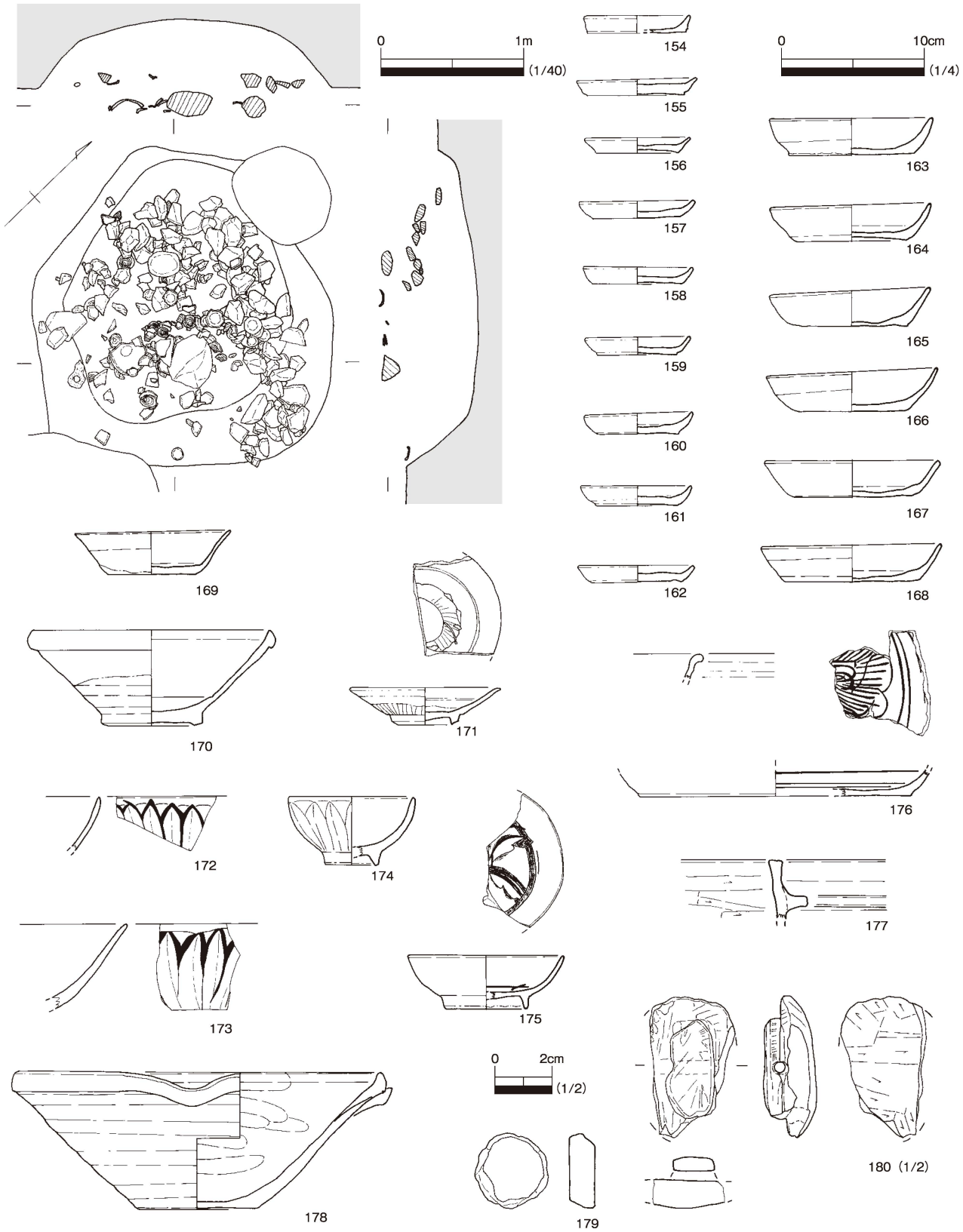

0
1m
(1/40)
0
10cm
(1/4)
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180 (1/2)
0
2cm
(1/2)

Fig.13　SX80

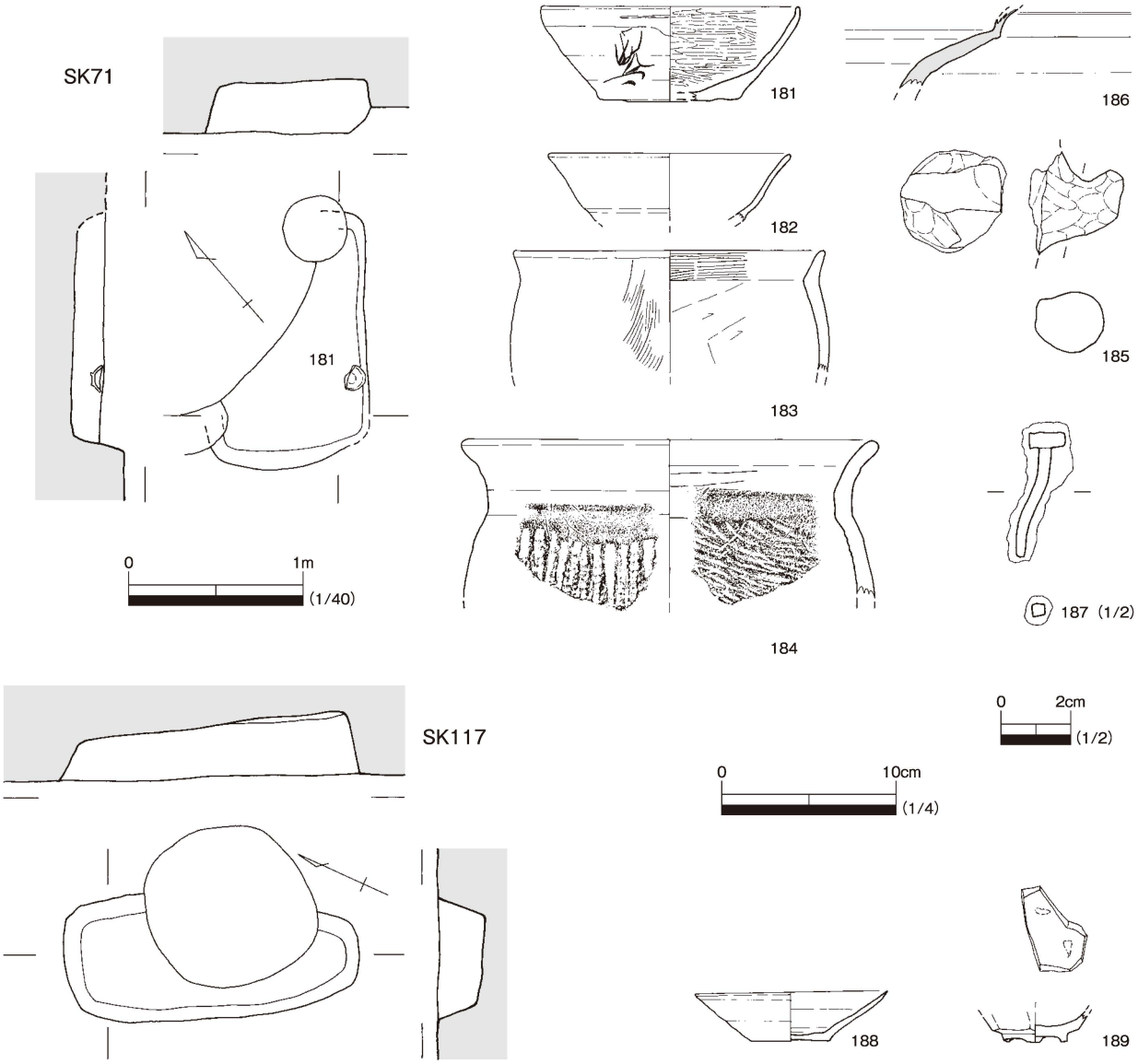


Fig.14　土坑墓

145 ～ 152 は枠内出土の土師器。153 は掘方（枠外）出土の口禿白磁。

4、集石遺構

SX80（Fig. 13　PL. 8）

長さ 2.2m・幅 2.1m、深さ 0.5m を測る集石土坑である。掘方は不明瞭で、底がもっと浅い可能性もある。石材は丁寧に積まれているのではなく、捨て石状で、一部土師皿を正位でずらして重ねているような部分もある。完形・破片を問わず多数の土師皿が出土し、図化したものは一部。銅銭も複数出土した。

154 ～ 168 は土師器。169 ～ 171 は白磁。169 は口禿。171 は内面見込みに環状釉剥ぎがみられる。172 ～ 175 は青磁。176 は中国陶器で、濃緑の釉を施す。177 は土師器の鍋。178 は瓦質の捏鉢。179 は瓦の再加工品。180 は滑石製で、石鍋の再加工品か。277・288 はガラス坩堝か。

5、土坑墓

SK71（Fig. 14　PL. 8）

長さ 1.5m、幅 1.0m、深さ 0.3m 程の方形の土坑で、完形に近い土器（181・半分に割られた状態？）が

出土し、土坑墓と考えられる。鉄釘も出土し、木棺墓の可能性もある。

181 は黒色土器 A 類で、外面に墨書（？）で細かな文様が入る。182 ～ 185 は土師器で、184 と 185 は同一個体の可能性がある。186 は須恵器。小片で不明確だが屈曲部で直径 40 ㎝程と大きい。187 は鉄釘。

SK117（Fig. 14　PL. 8）

長さ 1.7m、幅 0.7m、深さ 0.3m 程の土坑で、完形の土器（188）が出土し、土坑墓の可能性がある。188 は土師器。完形だが、出土位置を記録できなかった。189 は白磁。

6、土坑

SK17（Fig. 15・16）

第１面での遺構検出では掘り方がはっきりみえたが、掘り進める中で徐々に不明確になり、底面で SE40 の掘り方を検出した時点で掘削をやめた。よって底の標高等は不明確。SE40 埋没後、SE75 が埋まりきっていなかった部分が落ち込んだ痕跡かもしれない。長さ 1.8m で、深さは 1.1m 程だが、明確ではない。

190 ～ 192 は土師器。193 は青磁。194 は紛れ込みの畿内産土師器か。195 は土錘で 4.36g。器表を磨く。

SK37（Fig. 15）

第３面で検出した。掘り方は不明確だが、長さ 1.0m、深さ 0.35m 程。

SK38（Fig. 15）

第３面で検出したが、SE20 を切っており、本来は第１面から掘り込まれたものであろう。掘り方は不明確だが、長さ 1.6m、深さ 0.45m 程。

SK89（Fig. 15・16）

第２面で検出した。SE88 に切られる。当初は井戸と考え掘削したが、底が浅く、土坑とした。長さ 1.5m 以上、深さ 0.65m。

196 ～ 199 は土師器。200 は青磁。201 は白磁。底部付近に墨書がある。

SK107（Fig. 15・16）

第３面で検出したが、SE108 を切っており、本来は第１面から掘り込まれたものであろう。土層で中央付近に粘土が入っている。長さ 1.2m、深さ 0.6m 程。

202・203 は土師器。204 は石塔の部材などの可能性がある。

7、不明遺構

SX96・97（Fig. 15・16）

第２面で検出した。SD11 に切られる。SX96・97 ともに上端が２段になり、上段と下段の柱穴状の掘り込みが別遺構になる可能性もある。上段の壁および下段との境で鉄分の激しく沈着し、ガチガチに固まっていた。SD11 では多くの鉄滓を出土したため、SD11 から流れ出た鉄分が溜まって固まった可能性もある。

205 ～ 215 が SX96 出土。205 ～ 209 は土師器。210 は瓦器。211 ～ 213 は白磁。212・213 は内面見込みに環状釉剥ぎがみられる。214 は青磁。215 は滑石製の石錘で、石鍋の再加工品。重量は 41.00g。216・217 が SX97 出土。216 は土師器。217 は口禿白磁。

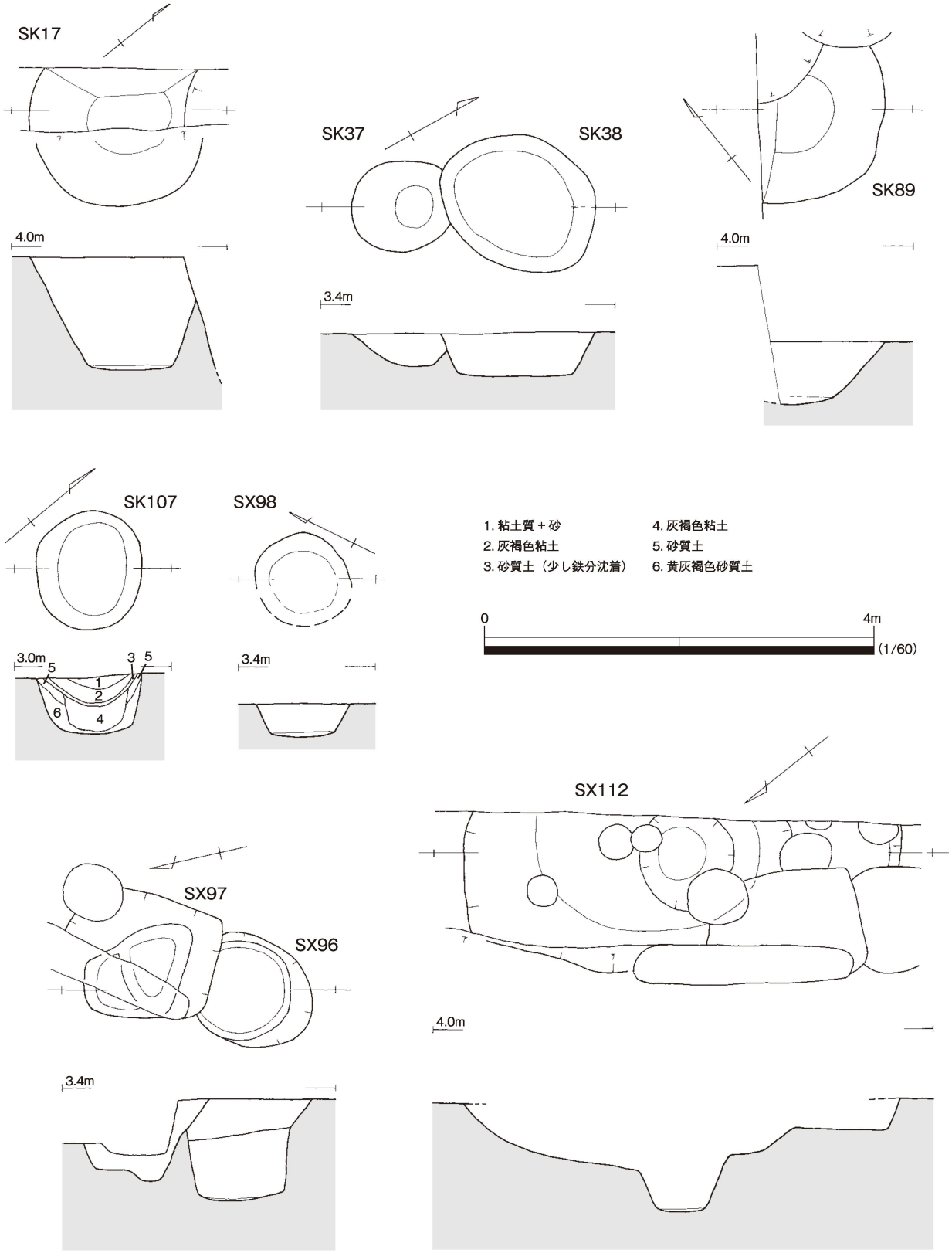

SK17
4.0m
SK37
SK38
3.4m
SK89
4.0m
SK107
3.0m
5
3
5
1
2
6
4
SX98
3.4m
1. 粘土質＋砂
2. 灰褐色粘土
3. 砂質土（少し鉄分沈着）
4. 灰褐色粘土
5. 砂質土
6. 黄灰褐色砂質土
0
4m
(1/60)
SX112
4.0m
SX97
SX96
3.4m

Fig.15　SK・SX

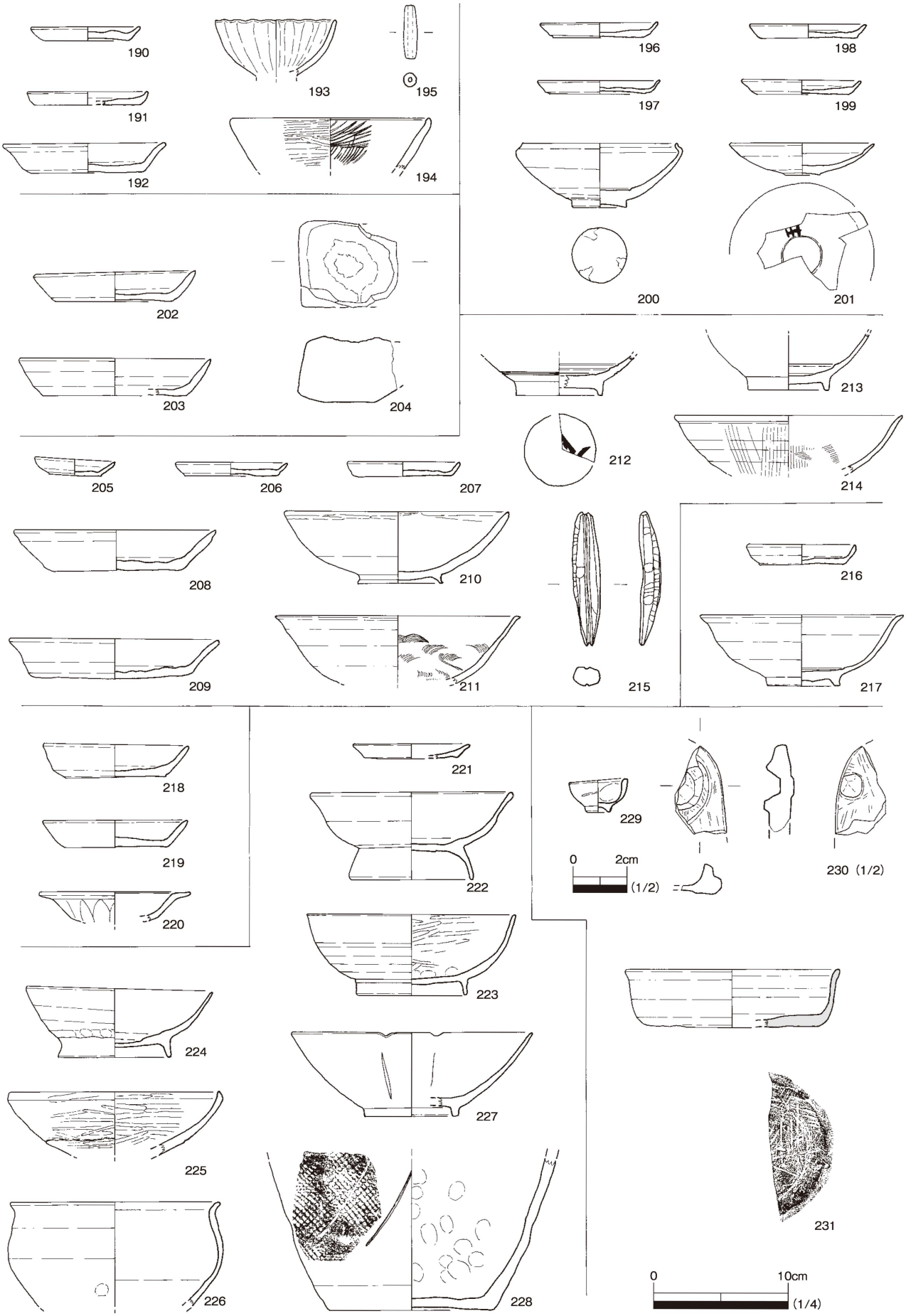


Fig.16　SK・SX・SP 出土遺物

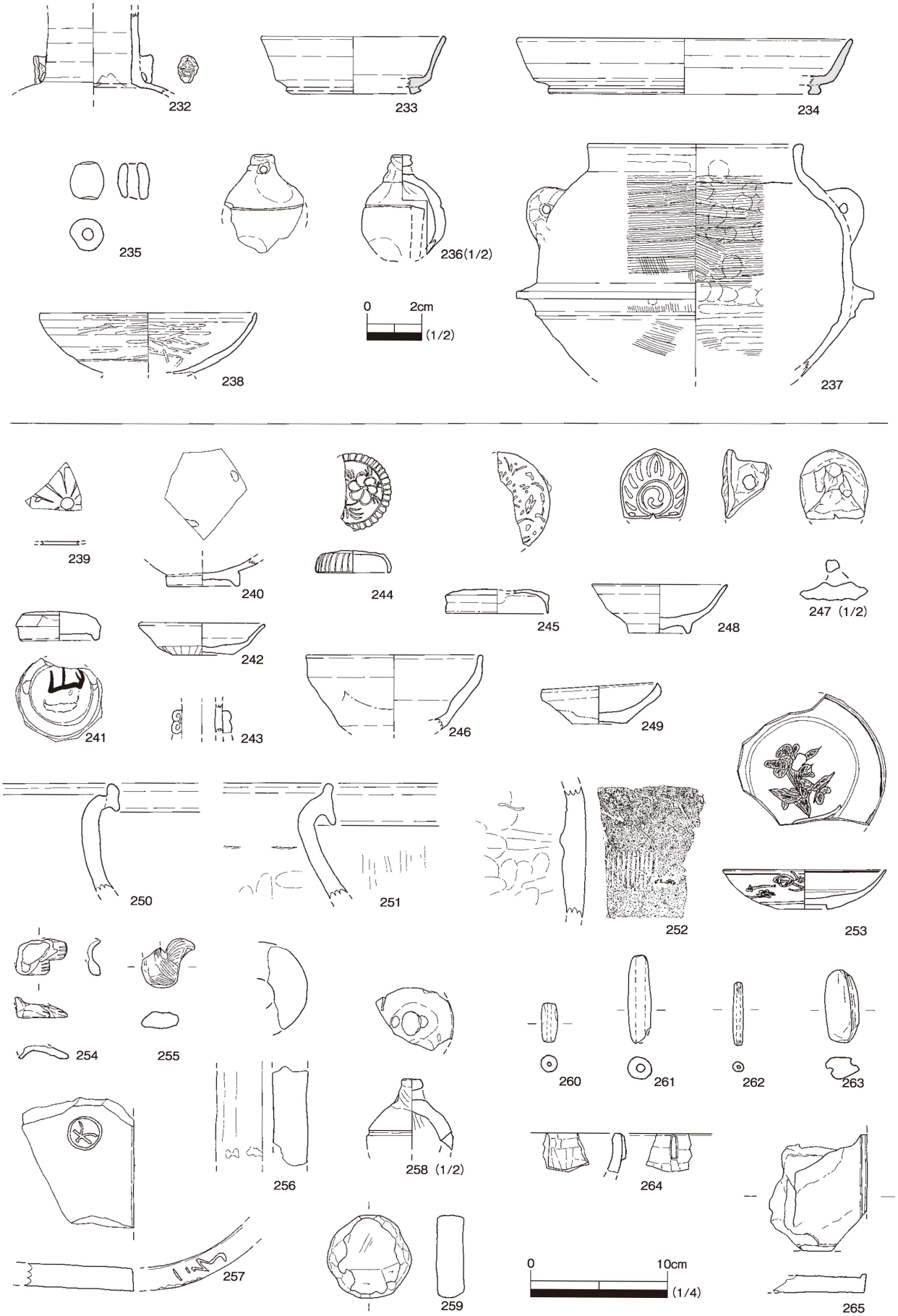


Fig.17　SP 表層出土遺物

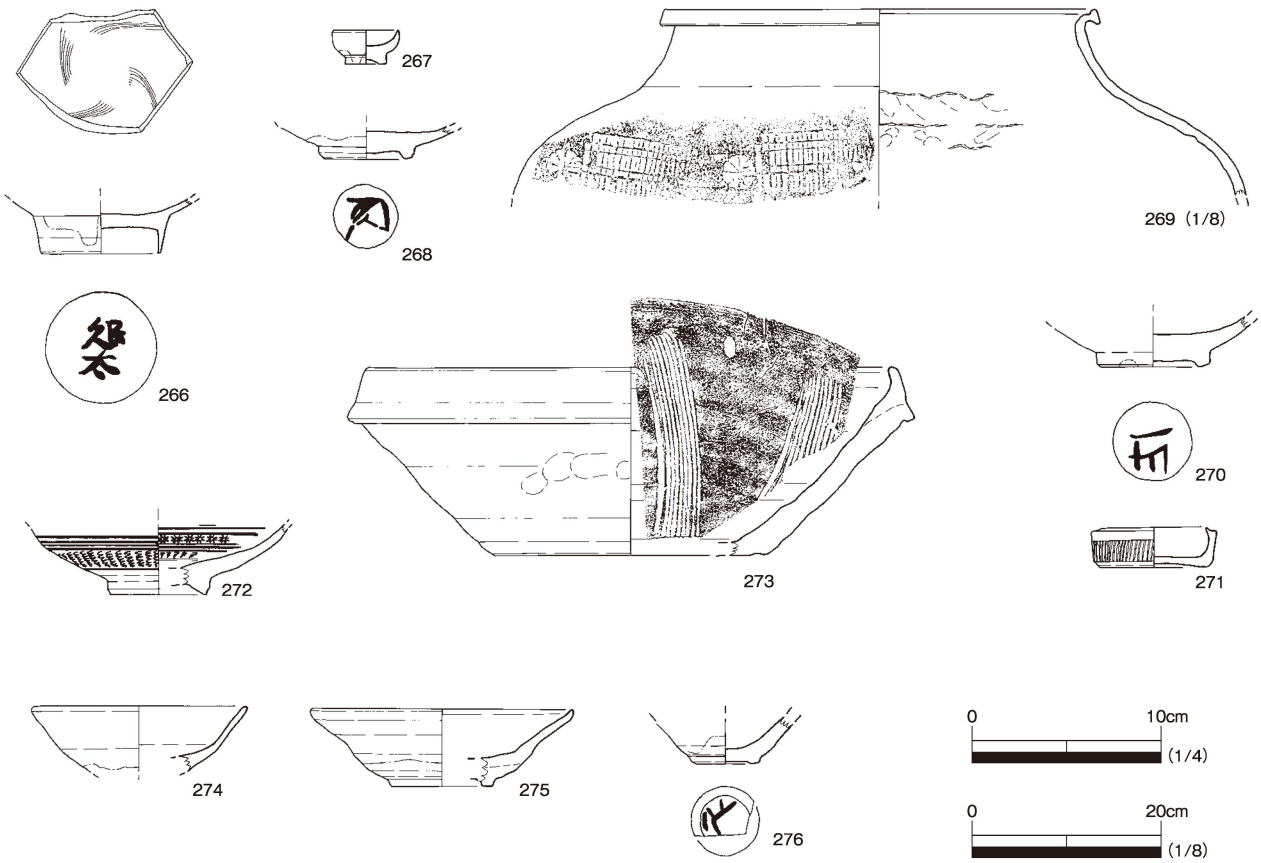
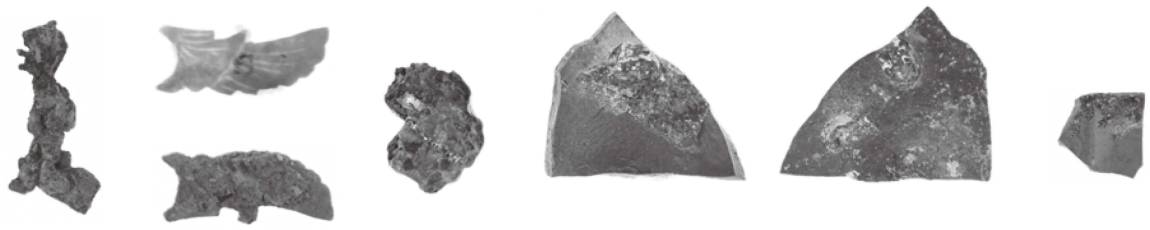


Fig.18　トレンチ・攪乱出土遺物



銅 035
銅滓

銅 064
刀装具（目貫）

64
ガラス滓か。
SD35 出土。

277
ガラス坩堝か。SX80 出土。
焼成は堅緻。中国陶器か。
カリウム鉛ガラス。

278
ガラス坩堝か。
SX80 出土。
焼成は瓦質。
カリウム鉛ガラス。

出土銅製品一覧

No.	種類	残存	出土位置
001	銭（字無？）	1/1	Ⅰ区 SD11
002	銭（□□□寶）	1/1	Ⅱ区 SD11
003	銭（字有）	1/1	Ⅱ区 SD11
004	銭（字有）	1/1	Ⅱ区 SD11
005	銭（□□□寶）	1/2	Ⅱ区 SD11
007	銭（咸平元寶）	1/1	Ⅱ区 SD35
008	銭（字無？）	1/1	Ⅱ区 SD12
009	銭（？）	1/3	Ⅱ区 SD12
010	銭（洪武通寶）	1/1	SD35 ？
011	銭（天□通寶）	1/1	SD35 第３面
012	銭（？）	1/1	Ⅱ区 SD35A・B
013	銭（？）	1/3	Ⅱ区 SD35A・B
014	銭（字有）	1/2	Ⅱ区 SD35A・B
015	銭（字無？）	1/1	SD11 ？
016A	銭（字無？）	1/1	SE15
016B	銭（字無？）	1/1	SE15
019	銭（紹？定通寶）	1/1	SE16 枠外
020	銭（字有）	1/1	SE16 枠外

No.	種類	残存	出土位置
022	銭（開元通寶）	1/1	SE16 枠外
023	銭（字有？）	1/1	SE16 枠外
024	銭（？）	1/1	SE19
031	銭（字有）	1/1	SE39 枠内
032	銭（字有）	1/5	SE39 枠内
033	銭（□□元寶）	1/1	SE40
035	銅滓	―	SE42
036	銭（「大日本」記載　穴無）	1/1	SE76 枠内
039	銭（字無？）	1/2	SK78
040	銭（□□□寶）	1/1	SK107
041	銭（？）	1/3	SX80
043	銭（聖宋元寶　篆書）	1/1	SP09
044	銭（□□元寶　篆書）	1/1	SP09
046	銭（字無？）	1/1	表層
047A	銭（？）	1/1	表層
047B	銭（？）	1/1	表層
048	銭（皇宋通寶）	1/1	表層
049	銭（？）	1/1	表層

No.	種類	残存	出土位置
051	銭（字有？）	1/6	表層
053	銭（咸平元寶）	1/1	表層
054	銭（？）	1/2	表層
060	銭（□□□寶）	1/1	表層
061	銭（字有）	3/4	表層
062	銭（□□元□？）	1/4	表層
063	銭（元豊通寶　篆書）	1/1	第２面掘り下げ
064	刀装具（目貫）	1/1	表層
065	銭（字有）	1/1	表層
066	銭（□□通寶）	2/3	表層
067	銭（開□通□）	1/3	表層
068	銭（？　穴大きい）	1/1	表層
069	銭（□□□寶）	1/1	表層
070	銭（？）	1/1	表層
071	銭（熙寧元寶）	1/1	トレンチ３
072	銭（五銖銭　穴大きい）	1/1	遺構不明

SX98（Fig. 15・16）

第３面で検出した。長さ 1.0m、深さ 0.35m程の掘り込み。第１面の検出時に SX98 付近で鉄分沈着が円形に巡り、SD11 を切るように見え、第３面検出時もこの付近で面的に鉄分沈着層があったため、それらに対応する掘り込みの可能性がある。ただし、円形に巡る鉄分沈着の内側を遺構として掘削する途中で、明らかに SD11 が鉄分沈着の範囲を切る様相を確認し、切り合いがよくわからない。SD11 以前の遺構が、SD11 の埋土に何らかの作用をもたらし、SD11 を切るように見える円形の鉄分沈着を出現させたと考える。

218 は土師器。219 は口禿白磁。220 は青磁。

SX112（Fig. 15・16）

第３面で検出した。長さ4.4m、深さ1.2m程で形態的に井戸のようにも見えるが、浅く、湧水点にまったく達していない。中央部が柱穴状の掘り込みになり、その底面付近で高麗陶器（228）が出土したが、完形で据えられている様相ではなかった。

221 ～ 226 は土師器。221 は最下層出土。225 は内外を丁寧に磨く。226 は外面に全体的に煤が付着する。227 は越州窯系青磁。上層出土。228 は高麗無釉陶器か。最下層出土。

８、柱穴出土の遺物（Fig. 16・17）

229 は SP09 出土の土師器。230 は SP31 出土の滑石製品。231 は SP51 出土の須恵器。232 は SP54 出土の白磁。233 は SP56 出土の須恵器。234 は SP70 出土の須恵器。235 は SP81 出土の石錘。重量は 15.90g。砂岩製。236･237 は SP82 出土。236 は土製鈴。237 は釜。238 は SP92 出土の黒色土器 A 類。

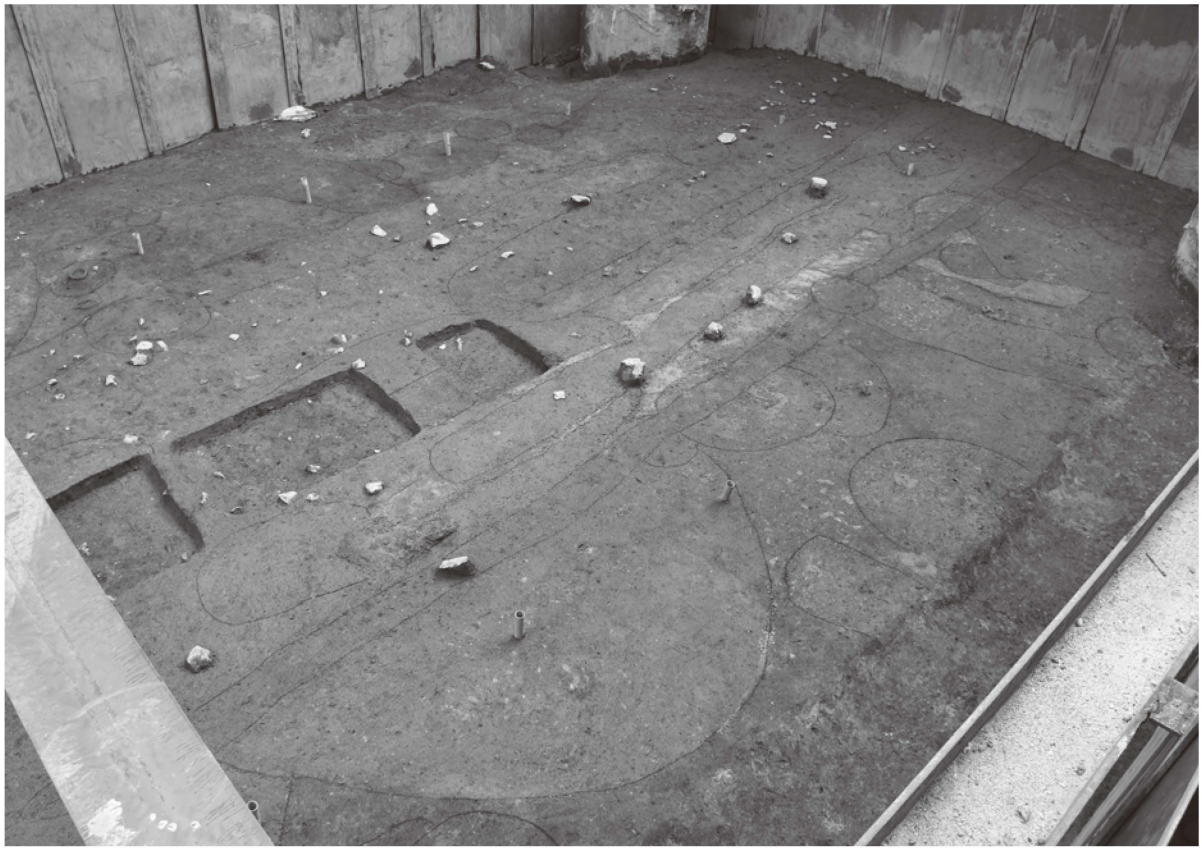
９、その他の遺物（Fig. 17・18）

表土や廃土、攪乱などから出土した遺物である。

239 は畿内系の瓦器か。240 は朝鮮の軟質白磁。241･242 は青磁。243 は青白磁か。244･245 は合子。246 は天目。247 は青磁。凸線で文様を施す。248 は紛青沙器で刷毛目を施す。249 は陶器。250 ～ 252 は常滑陶器か。253 は染付。254･255 は土人形。254 は人の足、255 は鶏か。256 は鞴羽口。257 は瓦で、凹線で押印がある。258 は土製鈴。259 は瓦の再加工品。260 ～ 262 は土錘。260 は 4.48g。261 は 15.67g。262 は 2.67g で器表を磨く。263 は滑石製の石錘。28.10g。264 は小型の石鍋。265 は硯。頁岩製。266 ～ 276 はトレンチ出土で、269 ～ 271 は SE20 に、その他は大溝に伴う可能性が高い。266 は白磁。267 は青磁。268 は朝鮮の軟質白磁。269 は常滑陶器。270･271 は青磁。272 は紛青沙器で象嵌を施す。273 は備前陶器擂鉢。274 は紛青沙器で刷毛目を施す。275 は陶器。276 は天目。

１０、小結

本調査区では、大溝や井戸の掘削によって、それ以前の遺構はあまり残っていない。最古の遺物は弥生土器(37)である。7 世紀後半以降、土器が一定量出土し、円面硯(117)や畿内産土師器(194)が注目できる。その後、９～ 10 世紀頃の遺構として土坑墓 SK71 や SX112 があり、SX112 では高麗陶器や越州窯系青磁が出土した。14 基検出した井戸および集石遺構 SX80 は、出土遺物から 13 ～ 14 世紀のものと考えられる。居住のための空間であった本調査区はその後、大溝が掘削され、長い期間掘り直しされながら維持される。この大溝は聖福寺の何らかの区画に関するものと推測される。掘削年代は SK117 が大溝に切られるとするならば、15 世紀後半頃だろうか。大溝は中世末の遺物を一定量含むが、近世の遺物はほとんど含まないことから、1587 年の太閤町割りの時に埋められた可能性を指摘できよう。



（1）Ⅰ区第１面検出（北から）

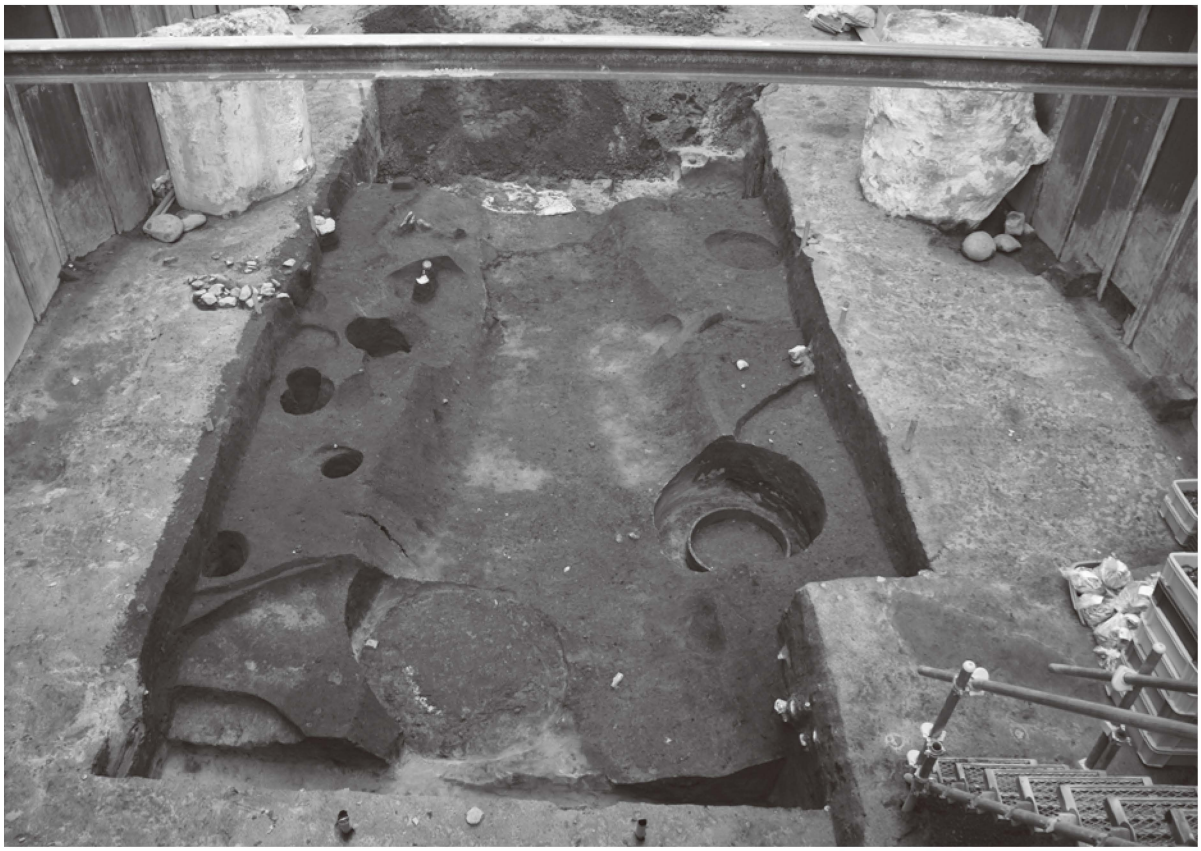
（2）Ⅱ区第１面検出（北東から）

PL.2

（1）Ⅰ区第１面全景（南西から）

（2）Ⅱ区第１面全景（北東から）

（1）Ⅰ区第２面全景（南西から）



（2）Ⅱ区第２面全景（北東から）

PL.4

（1）Ⅰ区第３面検出（南西から）

（2）Ⅱ区第３面検出（北東から）

（1）Ⅰ区第３面全景（南西から）

（2）Ⅱ区第３面全景（北東から）

PL.6

（1）表土鋤取り後の状況（南西から）

（2）Ⅰ区南西壁土層

（3）Ⅰ区南東壁土層

（4）ＳＤ１１・１２完掘（東から）

（5）ＳＤ１１・１２土層（Ⅰ区南西側）

（6）ＳＤ１１・１２土層（Ⅰ区中央）

（7）Ⅰ区井戸切り合い（西から）

（8）ＳＥ１５Ａ（東から）

（1）ＳＥ１６（南東から）

（2）ＳＥ１８（南東から）

（3）ＳＥ２０（北西から）

（4）ＳＥ３９（南西から）

（5）ＳＥ３９　井戸枠

（6）ＳＥ４０（東から）

（7）ＳＥ１０８（北東から）

（8）ＳＥ１０８　井戸枠

PL.8

（1）ＳＫ７１（北東から）

（2）ＳＫ１１７（北から）

（3）ＳＸ８０上層①(西から)

（4）ＳＸ８０上層②(南から)

（5）ＳＸ８０下層（東から）

（6）ＳＸ８０拡張部完掘（西から）

（7）ＳＸ９６・９７（北から）

（8）ＳＸ１１２（北から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	はかた
書　　名	博多１６５
副　書　名	―博多遺跡群第２１５次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第１３７１集
編著者名	朝岡俊也
編集機関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810－8620　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2019年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
はかたいせきぐん 博多遺跡群	ふくおかけんふくおかしはかたく 福岡県福岡市博多区 かみごふくまち 上呉服町126、127、128	40137	0121	33°35'50"	130°24'43"	20171012 ～ 20180119	195㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群	集落	古代／中世	古代-柱穴/中世-溝3+井戸14+集石遺構1+土坑墓2+土坑6+柱穴	古代-土師器+須恵器/中世-土師器+陶磁器+金属器	

要　　約

博多遺跡群は博多湾の旧海岸線沿いに形成された3列の砂丘上に展開し、本調査区は遺跡の中央付近やや北寄りに位置する。

検出した遺構は中世のものを中心とし、重複する大溝3～4条、井戸14基、集石遺構1基、土坑墓2基、および土坑・柱穴である。陶磁器・土師器・須恵器等が出土した。大溝は井戸群を切っており、室町時代頃のものである。聖福寺の区画に関わると考えられ、鉄滓等が多く出土した。井戸は桶を井戸枠とする。集石遺構の時期は鎌倉時代で、性格は不明。土坑墓は平安時代か。柱穴は奈良時代のものを含むが、調査区の大半の面積が大溝や井戸で占められており、建物の復元はできない。その他、遺構はないが、古墳時代の遺物がわずかに出土した。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1371集

博多１６５

―博多遺跡群第215次調査報告―

2019年（平成31年）3月25日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　株式会社月成印刷
福岡市博多区大井2丁目13番27号